

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 9 日現在

機関番号：15401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2015

課題番号：24653231

研究課題名(和文) 保育所・幼稚園から小学校への接続のための「学校ごっこ」プログラムの試み

研究課題名(英文) A play-based approach curriculum for transition to school: An Analysis of the practice of "Gakko Gokko" at the Early Childhood Education and Care.

研究代表者

七木田 敦 (NANAKIDA, ASTUSHI)

広島大学・教育学研究科(研究院)・教授

研究者番号：60252821

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、「学校ごっこ」実践の分析と理論的検討を通して、保育所・幼稚園における就学に向けた遊び中心の保育内容の可能性を明らかにすることである。本研究では就学を学校文化への参入プロセスとしてとらえる。そして、「学校ごっこ」実践は、その参入過程を保育園での遊びを通して擬似的に体験することを意味する。このような経験は、「小一プロブレム」の対策として実施するものではなく、新しい文化への参入にともない「小学生としての自分」を考える契機となることをねらったものである。本研究を通して、移行期の子どもたちの遊びと学びの意味を再考することとなった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to theoretically and practically examine the possibility of play in terms of preparation for school. Transition to school is a key theme in ECE. While play remains important in ECE, it has never been studied in terms of transition to school. It has been argued that play as approach curriculum is in opposition to learning which is the dominant activity in school. We have applied Vygotsky's theories to practice with an examination of "gakko gokko" ("playing school") at a childcare center. The early childhood teacher pretended to be a school teacher, and the children pretended to be school students. They played at studying school subjects such as, science and mathematics, and doing homework. During "gakko gokko", children performed the role of school student, and the teacher's role became more instructive than usual.

研究分野：幼児教育学

キーワード：幼児教育 保幼小連携 接続 就学準備

1. 研究開始当初の背景

わが国においては、保育所や幼稚園で、遊びを中心とした時間的空間的に自由な文化のなかで育ってきた子どもたちが、教科学習を中心とした学校文化に移ると上手く自己の力を発揮できなくなる現状が指摘されている。それに対して、「なめらかな接続」を目指し、行事交流、教員の人事交流、カリキュラム研究など様々な試みがなされている¹⁾。

1 福岡女学院大学

2 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期

3 広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設

しかしながら、これらの議論では保幼小連携をめぐる2つの問題点が看過されているように考えられる。第一に、「発達の連続性」、「学びの連続性」とよばれる概念の曖昧性により、実際の子どもからみた就学という視点が欠落している。例えば酒井・横井(2011)は、「発達の連続性」と「学びの連続性」の意味や違いについては不明確なまま多用されていると指摘している。これら用語を使用した議論では、就学前と小学校の間に想定される段差を無くすとはまではいわずとも、円滑(スムーズ)な移行が念頭に置かれている。しかし、これはあくまで教育する側からみた側面であり、「発達の連続性」という用語のもとに目指されている「なめらかな接続」により、見過ごされている子どもの姿があるのではないだろうか。例えば、チャイムが鳴っても立ち歩くという現象がひとくくりに子どもたちの問題行動とされてしまい、チャイムが鳴る意味が子どものなかで理解できているか否かという点は見過ごされがちである。また、小学校へ行くことが子どもにとってどのような意味をもつのかといった点についても同様に考慮されることはほとんどない。とりわけ、幼児期から児童期にかけての子ども自身がどのような点に葛藤を覚え、あるいは発達の困難性を抱えているかが不明確なままである。「小一プロブレム」をはじめとする議論では、子どもが学校をどのように理解しているのか、といった子どもからの視点が欠落しているように思われる。

もうひとつの課題として挙げられるのが、カリキュラムの問題である。福元(2014)は、幼小接続カリキュラムを「学校改革を志向するアプローチ」と「小一プロブレムを予防するアプローチ」の二つに整理して、特に後者のアプローチでは、小学校でのスタートカリキュラムとして生活科での内容との繋がりが重視された結果、生活科自体が児童の適応指導が目的になっている側面があるとしてその問題点を指摘している。また、一前・秋田の調査(2011)によれば、地方自治体の取り組みについてもスタートカリキュラムなどカリキュラム編成の必要性は感じられていても、実際に編成に着手している自治体は少ないという。さらに、各自治体で小学校1年

生段階でのスタートカリキュラムは比較的存在しているが、就学前の保育所・幼稚園における取り組みについては行事交流活動などの内容がほとんどであり、独自のアプローチカリキュラムについては十分な検討が行われていない²⁾。いうなれば、保育所・幼稚園で実践されているアプローチカリキュラムについては、その内容や妥当性などが議論されていないのである。

以上の課題をふまえ本研究では、就学に向けたアプローチカリキュラムとして、遊びを中心とした保育内容の可能性を探るため、ある保育園の年長クラスにおいて実施した「学校ごっこ」実践の検討を行う。「学校ごっこ」とは、小学校の生活をごっこ遊びとして組織的に行う保育実践であり、保育者が「小学校教員役」となり、子どもたちが「児童生徒役」となって行うごっこ遊びである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「学校ごっこ」実践の分析と理論的検討を通して、保育所・幼稚園における就学に向けた遊び中心の保育内容の可能性を明らかにすることである。本研究では就学を学校文化への参入プロセスとしてとらえる。そして、「学校ごっこ」実践は、その参入過程を保育園での遊びを通して擬似的に体験することを意味する。このような経験は、「小一プロブレム」の対策として実施するものではなく、新しい文化への参入にともない「小学生としての自分」を考える契機となることをねらったものである。本研究を通して、移行期の子どもたちの遊びと学びの意味の変容が明らかになるとともに、酒井(2011)が指摘する「学びのつなぎ方のフィロソフィー」について就学前の立場から議論することにつながると思われる。

3. 研究の方法

実施日時:

秋の実践 20XX年10月13日-20日(約1週間)

冬の実践 20XY年1月15日-31日(約2週間)

実施場所: X保育園

X保育園の保育方針: X保育園はキリスト教主義の保育を展開する定員250名の私立保育園である。保育内容は遊びを中心とした自由保育を柱としており、保育方針として「子どもの主体性を大切にする保育」を掲げている。対象クラス: 年長児の2クラス(各30名程度)

保育内容: 年長の担任を中心とした話し合いの中に、小学校教諭である保護者や主任保育者も参加して具体的なプログラムを考えた。概要は以下の通りである。

秋の「学校ごっこ」の主な内容

- ・ 箱の中身をあててみよう(話し合い)
- ・ 集中して一つのものを描く(デッサン)
- ・ どれが飲みたいかな(実験)

・ パネルを使ってクイズ(左右上下と数の認識)

「学校ごっこ」の約束事として、以下の4つを子どもたちと確認する。先生が話をしている時は、身体を先生の方に向けて聞く。何か言いたいことがあれば手をピシッと挙げて、当てられたら答える。学校ごっこに関係のない話はしない。トイレは学校ごっこが始まる前に行っておく。

冬の「学校ごっこ」の主な内容

・ ノートの説明、ひらがなに必要の線を書く、考えて発表する(「あ」のつく言葉) 宿題の説明

・ 宿題の振返り、ひらがなに必要の線を書く、考えて発表する(赤いもの)

・ 参観日、「しょうがっこうにいったら・・・」で始まる文をつくって発表

・ プリントで考えてみよう(仲間同士を線で結ぶ)

冬の実践からチャイムが導入される。また、保育者は日替わりで様々な服装(ジャージと笛、スーツなど)で先生になりきり、参観日(年中児クラスによる参観)などを設定した。これらはいずれも秋の実践後の反省会から、ごっこ遊びとして保育者も「本気でなりきってみよう」「楽しんでみよう」ことになり環境構成としてのチャイムなどを取り入れた。保育環境

通常のX保育園は自由保育を行っているため、机やイスは固定して出しておらず適宜必要に応じて出している。「学校ごっこ」の際は、小学校での班活動をイメージして、大きな机にグループ5名程度が座るかたちで6つの机を配置した。また、ホワイトボードを黒板代わりに適宜活用した。

また、冬の「学校ごっこ」では、自分の筆箱や鉛筆、ノートなどを家庭に準備してもらい、カバンに入れて持参してもらった。

2) 事例の抽出と分析の手続き

本研究では2クラスの「学校ごっこ」をビデオカメラおよび、メモにて記録した。そのなかから事例として35エピソードが抽出された。本研究ではさらに、保護者の連絡ノートにおける「学校ごっこ」の記述も事例として含めて検討を行った。以下では、4つの事例の分析と考察を行う。

4. 研究成果

「学校ごっこ」実践の分析枠組み-学校文化への参入プロセスとしての就学-

1) 遊びを中心としたアプローチカリキュラム

無藤(2011)は、幼児教育は小学校の準備教育ではなく独自の意義があるとして、遊びのなかにある「学びの芽生え」を大切にしたい保育の必要性を指摘している。「学びの芽生え」とは、遊びのなかでの興味関心や気づき、自己調整する能力などである。本研究もこの立場をふまえ、遊びを中心としたアプローチカリキュラムとして「学校ごっこ」実践をと

らえている。

このような遊びを中心としたアプローチカリキュラムの理論的な枠組みにはヴィゴツキーが参考になると考えられる。「就学前期における教授・学習と発達」(1932/2003)のなかで、ヴィゴツキーは就学前のカリキュラムの基本的観点について次のような区分を行っている。1歳から3歳までの子どもの学習は「自分自身のプログラム」に基づいて、子ども自身が行う学習であり、「自然発生的学習」と呼ぶ。他方で、小学校以降の時期は「教師のプログラム」によって学習するもので、教師からの提案に回答する形態で行われる学習を「反応的学習」と呼んでいる。そして、4歳から就学までの子どもはこの2つのタイプの間の移行的位置を占めており、「自然発生的-反応的学習」ともいべき学習形態があると指摘している(4)。この「自分自身のプログラム」としてヴィゴツキーは遊びを挙げており、そして、「教師のプログラム」として教授・学習を想定している。以上のようなヴィゴツキーの議論から、就学移行の時期には遊びと教授・学習のちょうど間のようなプログラムの必要性が示唆される。

「学校ごっこ」実践は、保育者と子どもたちが共に「学校を遊ぶ」活動である。子どもたちは保育者の想定する「学校」のなかで、小学生として振舞うことが要求される。例えば、普段の保育のなかでは、「ちゃん」と名前で呼ばれていたのが、「学校ごっこ」のなかでは、「さん」と名字で呼ばれる。また発言するときには挙手をすることが求められる。このように「学校ごっこ」実践は、自由遊びと学習活動の間のような活動であり、その意味では、ヴィゴツキーの言う「自然発生的-反応的学習」ということができるだろう。

2) 文化の移行経験としての「学校ごっこ」

本研究では就学することを制度化された学校という文化への参入プロセスとしてとらえる。保育所・幼稚園では時間的にも空間的にも比較的自由な環境であり、生活と遊びが中心の保育内容で構成されている。一方で、学校は教室や職員室など壁とドアで仕切られている空間、チャイムという区切られた時間、そして、クラスや班という共同体など環境が異なる。教育内容は教科に分かれ学習が中心になってくる。このような就学前と就学後の文化差について、例えば、丸山・無藤(1997)は、就学前の子どもが指を折って自然に行っている計数を「インフォーマル算数」として、就学後の「フォーマル算数」として比較しながらその特性が指摘されている。

「学校ごっこ」では、学校文化をごっこの世界を通して経験する。このような文化の疑似体験について、Kozulin(1998)は媒介学習経験(The mediated learning experience)という概念を提示している。文化における道具、それは最初、シンボルや記号などであり、

それを方向付ける他者がいる。この媒介学習経験は、環境と子どもを媒介する大人の存在を重要視している。すなわち、学校文化の熟達者としての保育者が、子どもと学校文化を調整する媒介者としているのである。そして冬の「学校ごっこ」では、チャイムが鳴り、口ひげやネクタイをつけた想像上の「先生」が登場する。そして、鉛筆や消しゴムやノートなど学校でつかう道具も登場する。このような文化的な道具の使用のあり方を教示し、その道具との向き合い方を媒介するのである。

本研究では、このような枠組みをふまえ、以下では「学校ごっこ」の文化に着目して事例を分析していく。ここでいう文化とは、目にはみえないルール、教師役の保育者の言葉遣い、そして、実際に使われる道具の使用などである。

1) 「学校ごっこ」の意味

「学校ごっこ」はあくまで遊びである。冬の「学校ごっこ」における線の練習も、ひらがなの習得を直接的な目的にしたものではない。従って「学校ごっこ」を通して、小学校で求められる力が育ったか否かは評価の観点にはならないだろう。

Newman & Holzman (1993) は、ヴィゴツキーの方法論を参照しながら、何かの目的のための方法論ではなく、問題を可視化して日常的な問いに視座を与える道具として機能するものとしての方法論の可能性について論じている。一般科学における何かを問題解決のために有効な方法論である「結果のための道具 (tool for result methodology)」ではなく、「道具と結果 (tool and result methodology)」方法論を提唱する (Newman & Holzman, 1993, p.38)。この枠組みに従うならば、小一プロブレムを解決するための「学校ごっこ」(tool for result)ではなく、「学校ごっこ」を通して遊びを楽しみ、そのプロセスに意味をみいだそうとする (tool and result) アプローチだと言えるだろう。

2) 自発的遊びと「学校ごっこ」の違い

本研究での「学校ごっこ」実践は、自発的な遊びとしてのごっこ遊びではない。保育者が組織化して作りあげた「学校」という遊びに子どもたちが乗るかたちではじめられた。自由保育中心の保育を展開してきたX保育園の子どもたちにとって、慣れない「設定保育」に似たものであっただろう。しかし、ここで重要な点は保育者自身も本気で遊んだということである。事例4のA保育者の葛藤でみられるように「教える」ことへの違和感を感じつつも、チャイムを鳴らし、そしてヒゲとネクタイをつけて遊ぶ保育者の姿がそこにはある。

河崎 (1994) や加用 (1994) らは、保育者や周囲の大人が仕掛ける想像世界のなかで、広がる遊びの面白さとその発達的な意義を論じている。今回の「学校ごっこ」も保育者

の準備したごっこ遊びの舞台で、子どもたち自身が楽しみながら小学生として振舞う姿がみられている。また、今回の「学校ごっこ」実践の特徴は、保育者が先生役となったことにある。普段の子どもの様子を見ているからこそ「学校ごっこ」のなかで背伸びして意気込んでいる姿に気づくことができたり、その後保育のなかでフォローすることも可能である。このように保育園の日常との連続性のなかに「学校ごっこ」実践が位置づけられているのも利点の一つであったと考えられる。

3) 「学校ごっこ」実践を通して何が育ったのか - レディネスかハビトゥスカ -

保幼小連携の重要性が議論される時、ともすれば、われわれは小学校で問題を起こさずスムーズに学校に適應することが良いこととして社会的に求められていると勘違いしてしまうことがある。しかしながら、福元 (2014) が指摘しているように小一プロブレムを適應の問題とすり替えることには大きな危険性を孕んでいる。小一プロブレムといった現象と、就学前に必要な子どもの保育内容や接続期カリキュラムは別で考えられるべきである。では「学校ごっこ」実践は子どもたちの経験にとってどのような意味があるのだろうか。レディネス形成、というのがひとつの回答として考えられるだろう。就学する準備を行う保育である。このような小学校への準備性の議論は欧米を中心とした諸外国でも頻繁に行われてきた。しかしながら、就学レディネスとした場合、準備ができているか否かという点に焦点化され、スキルや技能に還元されてしまう恐れがある。また、近年ではレディネスとしての技能を子どもに育てることを強調するよりも、子どもにとっての社会文化的資本として、園と学校との連携など移行のためのカリキュラムやプログラムなどが議論されているという (Dockett, Petriwskyj & Perry, 2014)。

以上の背景をふまえ、本研究で参照したいのがハビトゥスという概念である。ブルデュール (1988) によれば、ハビトゥス (habitus) とは、特定の状況における適切な雰囲気をつかんだり、何が求められているかを理解するような「実践感覚」のことである。それは個人の資質や能力などに還元できるものではなく、当該文化に参入した場合振る舞えるといった感覚として機能するものと定義される。「学校ごっこ」実践で言えば、小学校という独自の文化のなかに入ればそれなりに振る舞えるといった実践感覚の涵養である。また、ホルツマン (2014) は発達において世界をパフォーマンスする実践のなかでの二重の在り方を指摘している。すなわち、活動時にパフォーマンスする今の自分 (being) と、活動時に、今の自分ではない、なりつつある存在 (becoming) がある、という二重性である。「学校ごっこ」実践とは、新しい文化へ参入する過程における戸惑いや葛藤を

子ども自身が自覚しつつ、学校という文化の中で振る舞うことができる新しい「小学生としての自分」を形成するプロセスであり、それを支える保育内容として理解されるべきだろう。

これまで保育所や幼稚園で行われてきたアプローチカリキュラムは、交流行事をはじめ実際の小学校へ出向き「学校で遊ぶ」経験だったといえるだろう。それに対して、本研究で検討してきた「学校ごっこ」実践は、子どもたちにとって、現実の学校ではなく、想像世界の「学校を遊ぶ」経験である。学校という文化を遊ぶことを通して、学校での振る舞い(ハビトゥス)や、教師や学習への向き合いかたを先生役の保育者を媒介にしながら経験していく。このような間接的な経験は、子どもたちに小学校への期待や不安を含め様々な感情を伴うものだろう。それはリアルではないから意味が無いというのではなく、想像世界だからこそ、今の自分では無い「小学生としての自分」を演じ、学校の世界へと一歩あゆみを進めるきっかけになるのではないだろうか。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

岡花祈一郎、津川典子、七木田 敦 (2016) 遊びを中心としたアプローチカリキュラムの可能性-保育園における「学校ごっこ」実践の検討を通して- (2016) 広島大学大学院教育学研究科 幼研年報、12 - 19 (査読無)

〔学会発表〕(計 1 件)

Kiichiro Okahana・Atsushi Nanakida, "The Meaning of "Make-Believe Play of School" in Preschool years children:Vygotskian Approach for Transition to School. , The 11th Annual Hawaii International Conference on Education. , Jan.4th 2012. pp.115. Hawaii, U.S.A

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

七木田 敦 (NANAKIDA ATSUSHI)

広島大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号: 60252821

(2) 研究分担者

岡花 祈一郎 (OKAHANA KIICHIRO)

福岡女学院大学・人間関係学部・講師

研究者番号: 50512555